河内潟とウォーターフロント「瓜生堂物語」

南　光弘

一・はじめに

河内潟のウォーターフロント瓜生堂遺跡は縄文時代に始まり弥生時代に大規模な集落を形成し、河内潟が河内湖、淵と変化すると共に終焉を迎えるが、その伝統文化は後世まで続いた遺跡である。数次にわたる河内潟南岸の瓜生堂遺跡及び周辺遺跡を発掘調査された する報告集が、大阪府文化財センター、東大阪市教育委員会から随時刊行されてきた。過日、河内の郷土文化サークル主催の「城東サロン」において話題提供をする機会があり、これらの報告集からあらためて「瓜生堂遺跡」とは、如何なる遺跡だったのか、また、国の成り立ちにつながる「饒速東遷」「神武東征」との関連について若干の考えをまとめた。

瓜生堂遺跡は、一九七〇年からの中央環状線、近畿自動車道工事に伴い発掘された遺構である。当初は東西一〇〇〇m×南北八〇〇mの範囲が想定されており大規模な方形周溝墓域で七三基という数の多さと完全な形で発掘されたことで全国的に有名になった。その後、近鉄奈良線の連続高架工事に伴った発掘調査によってさらに規模が大きくなり新たな展開を見せている。

「河内潟」は縄文海進により大阪湾が大きく生駒山麓まで入り込んでいた時代から、淀川、古大和川の土砂によって徐々に陸地化し、長柄砂州などによりできた狭い水路から海に通ずる潟湖（せきこ）で、潮の干満によって陸地が現れたり水面下に隠れたりする。

二・瓜生堂遺跡の歴史的変遷

（一）縄文期の瓜生堂遺跡

Ⅰ　瓜生堂遺跡は古大和川水系の縄文晩期の河口部に河内潟の時代（BC十C～AD二C前後）に発達した集落である。縄文期の状況については、楠根川と第二寝屋川の合流点の調査から縄文晩期の凸帯文土器、シルト層の自然川底からは縄文期の人、鹿、水鳥の足跡等の痕跡と魚などを捕獲する竹を編んだ筌が出土している。

また、小阪ポンプ場西の第二寝屋川川床からは「幻の貝塚」と言われている埋蔵物が検出されたが惜しくも一九六六年、万博前の工事で破壊されている。しかし、「貝塚」については、幸いにも河内潟の入り江にある西隣りの宮ノ下貝塚遺跡（一九九二年～）を本市文化材課により本格的な発掘調査がなされている。

Ⅱ　宮ノ下貝塚遺跡の概要

①貝塚は、貝層二十cm～一mの厚さで東西十m、南北二五mの広さがあり、淡水産（セタシジミ、タニシ）汽水産（カキ、ヤマトシジミ）の貝殻。海水産（ハマグリ、イシダイ、サワラ、ボラ）の貝や魚骨とスッポンの骨。イノシシなどの獣骨が出土し、古い縄文時代からの漁撈活動の実態と徐々に淡水化した実態が明らかになっている。

また、凸帯文土器、縄文期の舟橋・長原式土器、滋賀里Ⅲ式土器等が、そして、東北地方に多くの発掘例のある独鈷石が出土している。さらに、縄文晩期の土偶が馬場川遺跡、鬼虎川遺跡、西の辻遺跡について出土している。

②次に、宮ノ下貝塚遺跡の第二次発掘調査報告書（一九九六年）を見ると、宮ノ下遺跡の環境の変遷が読み取れる。

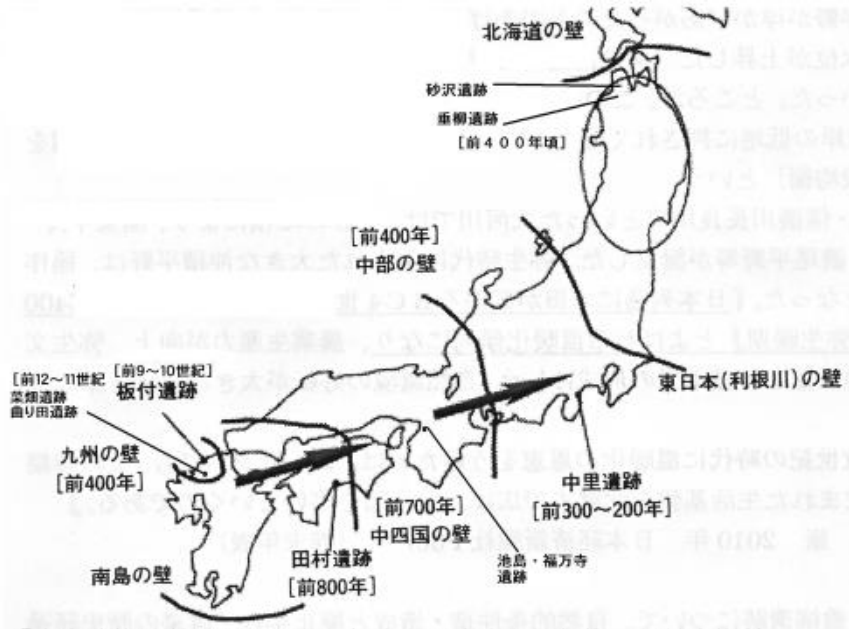
上層、弥生前期中葉の層には汽水の影響があり、後背湿地に稲作が行われていた可能性が高く、中層、縄文晩期から弥生前期初頭の層は、汽水の影響があることが分かる。そして、下層、縄文晩期・二七〇〇～二五〇〇年前）は、河内潟南岸、古大和川の河口部にあたっており、この頃には既にかなりの規模の集落を形成しており、弥生前期の縄文人・弥生人が混住し、徐々に進行し接触とその深まりがみられ、新しい青銅器文化、そして水田稲作農耕の静かな流入が想像できる。

また、貝塚上層から石包丁が大量出土していることから大規模な稲作農耕が発達していたであろうことが推量できる。

貝塚形成は、弥生中期中葉（二千年前）に終わるが、集落をあげての全面的稲作農耕が行われていたことは、中期後半の掘立柱建物、杭列、土墳墓、木棺墓が検出されていることからも分かる。

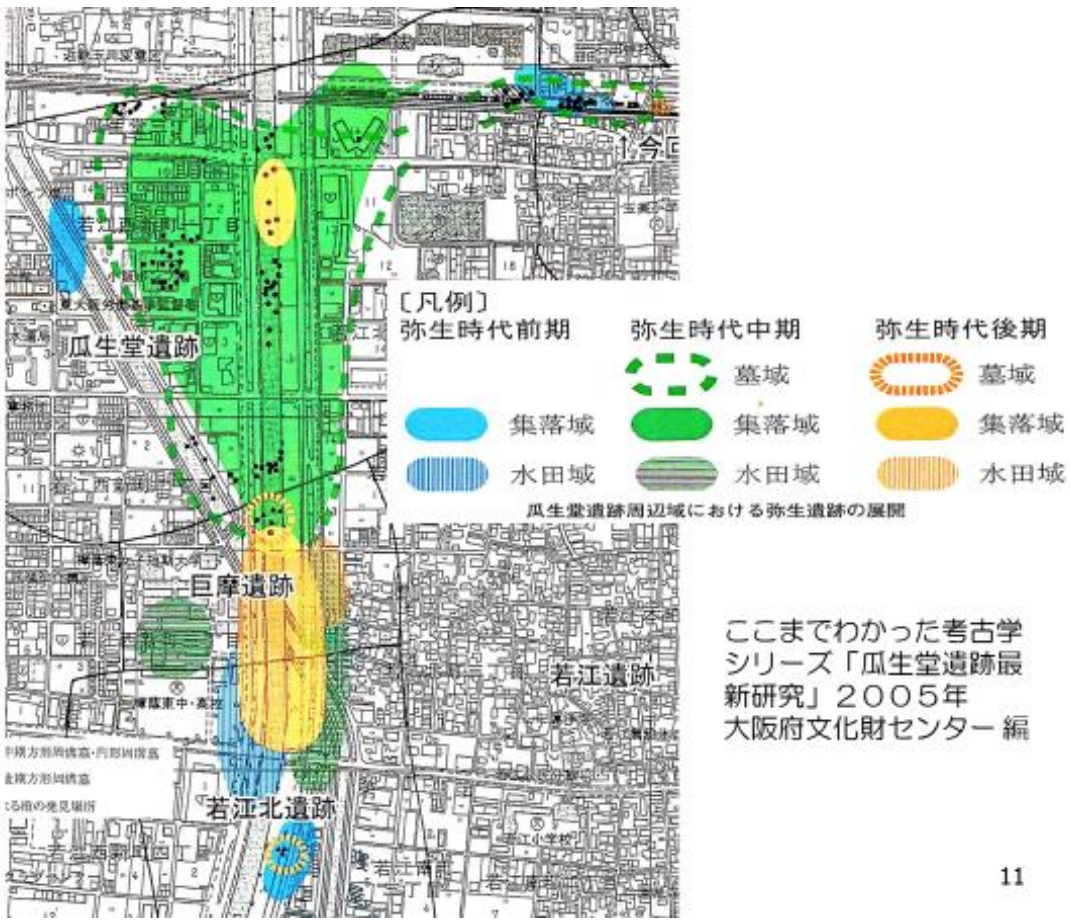
（二）瓜生堂遺跡の水田稲作遺構

野生稲の栽培は、最近のイネ属機動細胞硅酸体・微化石（プラント・オパール）の研究により、長江流域の河姆渡（かぼと）遺跡（紀元前五千年前）を起源として朝鮮半島経由ではなく、直接、北部九州に伝播し、長い年月をかけて吉備、瓜生堂、福万寺遺跡などに伝播したと考えられることが定説となってきている。また、近年、加速器質量分析法による炭素一四年代測定法等の進歩により発掘された土器などの年代測定が、かなり正確になってきたという。例えば、瓜生堂遺跡から発掘された写真の土器（口径二〇・八cm）が、弥生前期（今から二八〇〇年～二四〇〇年前）と測定されている。（弥生文化博物館調べ）従来弥生時代とは、稲が栽培された二四〇〇年前頃からと教えられてきたが四百年も遡ることになる。ところで、北九州の板付、夜臼遺跡は三〇〇〇年以上も前から野生稲の栽培が行われており、大阪とは約四～五〇〇年の差があることになる。



「弥生時代はどうかわるか」縄文から弥生から転換　小林青樹著

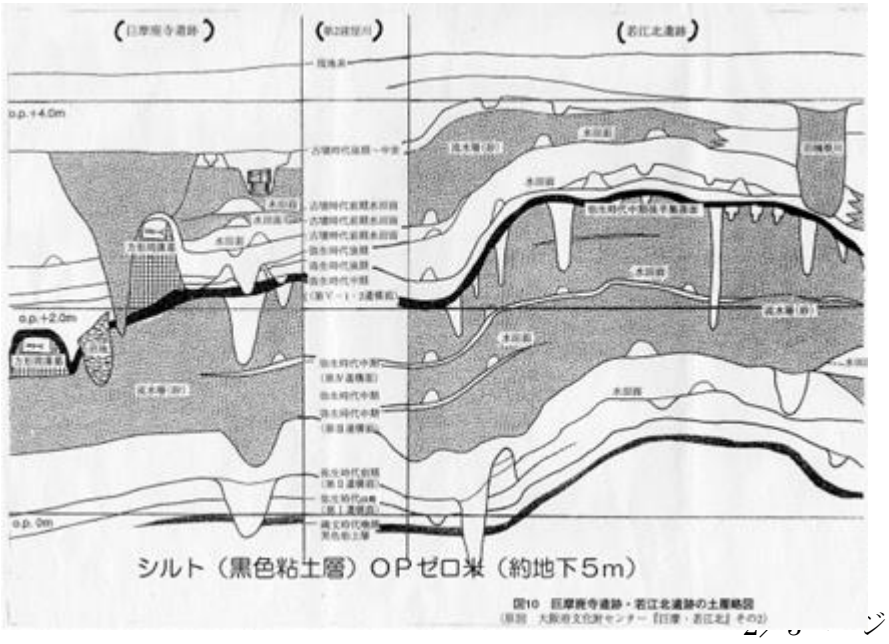
瓜生堂の水田稲作は、縄文系先住民の参加協力による吉備系小区画水田稲作農耕が発展し集落を形成していった。住居は、縄文以来の竪穴式住居であった。大きさは梁間二間（五・五m）×桁行四間（八・一m）。



床面積四四㎡の掘立柱建物が一〇棟以上の集落跡が検出されている。城壁や壁がなく七条の溝と各幅五m深さ一mの環濠が掘られ、土塁が築かれていたようだ。ここから北九州・遠賀川系の土器、生駒西麓（胎土）産の土器、そして、木の葉文彩文土器が出土しているが、生駒西麓（胎土）産の土器が使用されていたことからは、縄文系集団の本拠地である生駒西麓の集落との日常的な交流が想像できる。また、二上山のサヌカイト製の石鏃（やじり）も出土している。隣の若江北遺跡からは、多数の石鏃が出土しているが一〇〇％近くが香川・金山産の鋭利なサヌカイト製であった。

（三）大洪水と集落

瓜生堂遺跡と同時期か、やや先行する瓜生堂の南にあたる巨摩廃寺・若江北遺跡は、縄文晩期から弥生前期への継続性を持つ遺跡として知られている。土層略図には、弥生中期から後期（ＢＣ一Ｃ～ＡＤ三Ｃ）にかけての三層の水田面層とサンドイッチ状に存在する堆積砂層（地下二m）、方形周溝墓・集落・水田遺構出土層が顕れている。この土層略図からは、一部の人々



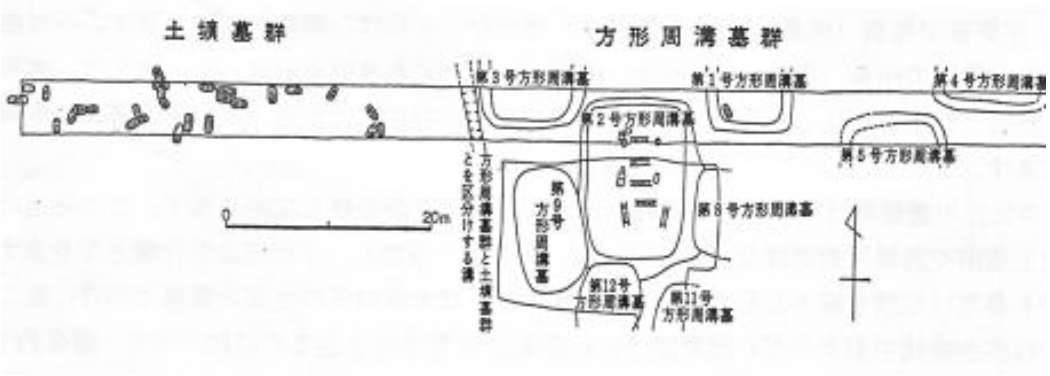
は隣接の瓜生堂の東南部に移動したであろうが、三度の大洪水と度々の洪水被害にもめげずこの地を棄てずに　継続された集落が存在していたことが読み取れる。

弥生後期に入って全てが水田となったこの地点の水田は吉備型小区画水田であり、一枚が五m×二～三m程度の大きさであった。

（四）微高地に造られた大墓域

Ⅰ　全国的にも有名になった方形周溝墓大墓域は、中央環状線工事、寝屋川開削工事等に伴う発掘調査によって見いだされた遺跡である。近鉄奈良線・第二寝屋川・中央環状線がつくる約一haの三角地帯に密集した状態で墓群四～五箇所が検出され全体で七三基になった。特に、一九六五年、中央環状線敷地の南北三〇〇mにわたり散乱していた夥しい土器片と遺物があり、盛土（方形周溝墓）の中から大阪湾型銅戈の先端部が採取されている。

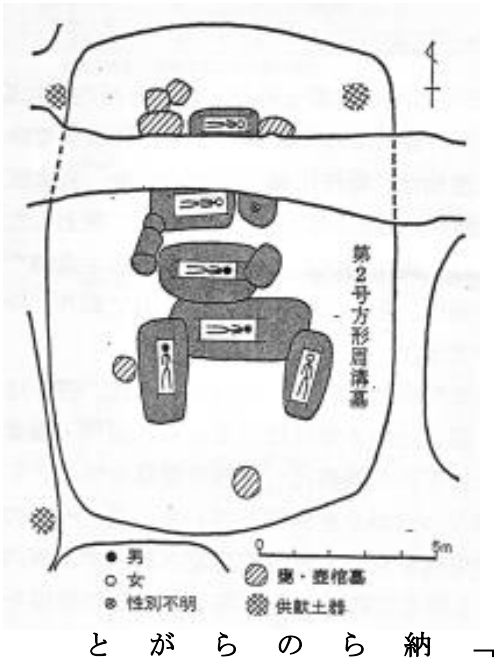
また、一九六六年の第二寝屋川掘削工事に伴う発掘調査では、組合せ式木棺（コウヤマキ、ヒノキ）が、開削した断面に露出した状態で見つかっている。



これらの方形周溝墓は、満潮・大潮・風水害による氾濫から最も安全で安定した微高地に営まれた墓域であること、そして、平均三世帯を葬り祀った半恒久墓とも言えるものであった。

Ⅱ　完全な方形周溝墓「第二号墓」の出土

大阪府営小阪ポンプ場の地表下約三m～四mの深さにある方形周溝墓「第二号墓」は、弥生中期後半（約二千年前）の遺構で、当時全国で初めて墳丘と周濠の全く損傷のない完全な形での出土であって弥生時代の墓制を完全に解明するものとして注目を浴びた。東西一〇m・南北一五m・高さ一・二mの墳丘中央部の六基の組合せ木棺と周辺部の土坑墓六基と甕棺六基あり、三世帯の夫婦とその子どもの家族墓であった。埋葬された位置から男性優位であったことや、配偶者は他集落から迎えていたことが土器供献土器の産地から、他地域との交流が読み取れ、二号墳女性木棺は都出比呂志氏の自著『古墳出現前夜の集団関係』の中で、東奈良の出自の被葬者と、述べられている。さらに、弥生期の葬送儀式の実態、厚葬思想と盛大な祭祀のあり方を窺い知ることができる。しかし、「厚葬」ではあるが、



「威信材」の埋納がないことから特定の個人への富の集中は見られず階級分化が微弱であったと考えられる。

また、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡から多数の人骨が発掘され、性別、年令などは特定されている。弥生期の人骨には、通説として、「鏃（やじり）が刺さった頭蓋骨」などをイメージしがちだが、瓜生堂遺跡からはいわゆる「戦士の墓」は一五号方形周溝墓の土坑墓の一体のみであった。

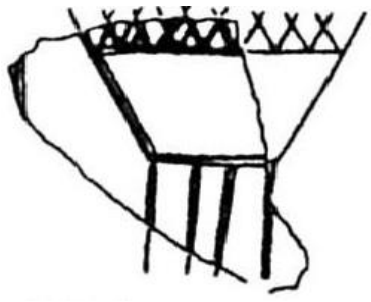
「七三基に達する墳丘墓が出土し、既に破壊されたもの未発掘、地に眠るものを含めると推定総数はこの数倍にのぼる」と、発掘調査当時からも指摘されていたが、瓜生堂遺跡は弥生期屈指の大集落であったことは確かであった。なお、鬼虎川遺跡からは約三〇基検出されている。

（五）交易の拠点、瓜生堂大規模集落

Ⅰ　瓜生堂遺跡は、城壁のない初期農耕集落から発展し、前期から少し移動しているが、弥生中期には大規模な集落域を形成している。瓜生堂遺跡の指定範囲は、八十万㎡である。人口は、池上曽根遺跡は、面積約八万㎡で人口約一五〇〇名と推定されてことから、一万名以上と考えてもおかしくない。

瓜生堂遺跡が大きく繁栄した源泉は、他地域との交流・交易の広さが考えられる。

前述の「河内の土器」と「他地方の土器」を一緒に納めた供献土器からは通婚圏の広がりが読み取れる。また、讃岐産、土佐産の土器が出土している事実はより広範囲な交流・交易が行われていたことが推量できる。そして、瓜生堂の巨大神殿を図柄に描いた絵画土器片が、神殿近くの祭祀場に埋納されていたことから考えられることは、どのような祭祀であったか不明だが、多くの人々が集い、「神」への願い、自然への畏敬、豊穣を祈る儀式が行われていたことは容易に想像される。

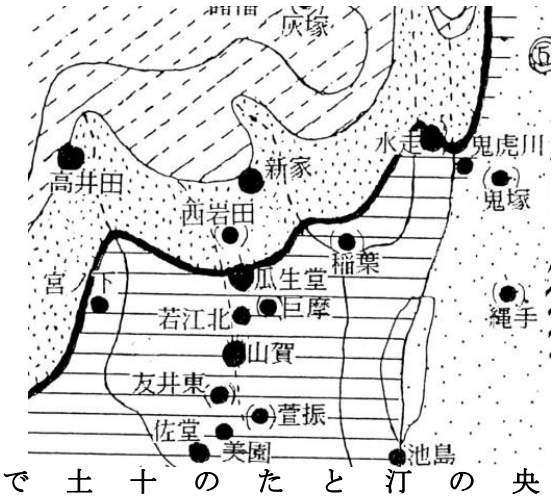


讃岐産壺　土佐産甕

方形周溝墓供献土器

瓜生堂は、大規模な繁栄した集落を形成すると共に他地域との交流・交易によって高い文化水準を得ていたといえる。

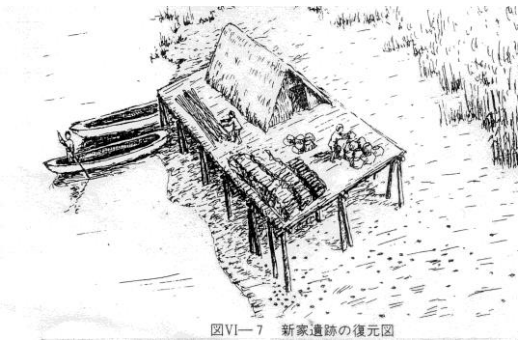
Ⅱ　大規模集落形成を可能にした新家遺跡



瓜生堂の北、約一㎞中央環状線と暗越え奈良街道の交差点の北辺りの干潮位汀線にある遺跡が新家遺跡と呼ばれている。発掘されたのは、アシの根の腐植土の微高地に打ち込まれた数十本の杭列、散乱する弥生土器片や無数のヒトの足跡であった。

干満による水位変化を通じて利用できる舟着場には適していたようだ。ここは、漁労基地として、漁舟の仮泊施設があり、また、外洋交易用の港的な活用もされたのだろうか。一種の水上生活区を形成していたと考えられる。

なお、久宝寺南遺跡から外洋航海も可能と考えられる大きさの準構造船の前半部が出土している。


図Ⅵ―7　新家遺跡の復元図

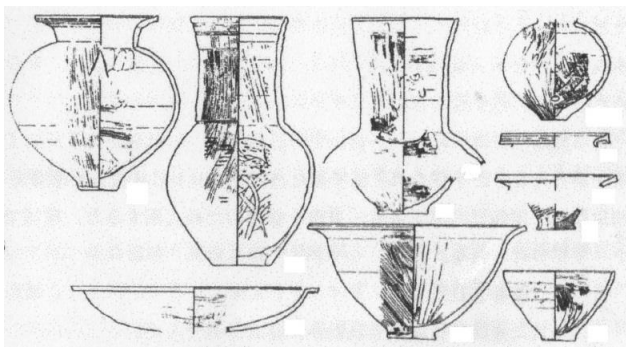
Ⅲ　貨幣「貨泉」の出土

先進的な文化交流が行われ、交易の窓口となっていた瓜生堂遺跡から年代不明の「貨泉」一枚と、巨摩廃寺遺跡の二号方形周溝墓を壊して流れる自然河川の遺構面（弥生後期）から、山陽・吉備、瀬戸内的要素が強い土器編年Ⅴ―〇様式の土器と共に、一枚（径二・三㎝重さ一・三ｇ）出土している。

巨摩（貨泉Ⅲ）

貨泉は、中国「新」（王莽、紀元八年～二三年）時代の貨幣だが、西日本中心に九九枚出土しているが、生駒山より東、大和からは一枚もない。

特徴的な出土例をあげると、瓜生堂に近い亀井遺跡から弥生後期末の土器と共に四枚、吉備・高塚遺跡からは二五枚貯蔵穴から出土している。また、北部九州・今宿五郎江遺跡の五枚は、環濠上層の粘土層から出土している。これらの貨泉はいずれも貯蔵のための土器や窪みから出土していることから祭祀ではなく青銅器製造の材料として、移入、輸入されたのではと考えられる。



Ⅳ　瓜生堂遺跡、銅戈の鋳型。

鬼虎川遺跡、銅剣の鋳型

瓜生堂遺跡から弥生中期中～後頃の、大阪湾型銅戈ｃ類の石製鋳型（長さ二四㎝・幅８㎝）は複合鋸歯文で同型の銅戈が茨木、東奈良で出土しており、瓜生堂に武器製造工房（場）の存在の可能性を示している。他に、弥生中期の銅鐸形土製品、弥生中期の銅剣形石剣、石戈、鉄斧（鋳造）が出土している。

また、鬼虎川遺跡からは、弥生中期中～後頃の整地層から四〇㎝の和泉砂岩の銅剣鋳型（中細型）と銅鐸、銅釧の鋳型が出土している。銅剣鋳型の出土は田能遺跡に次いで二例目であった。

これらの出土物は北九州、出雲との関係を知る上で貴重なことであり、瓜生堂遺跡は鬼虎川と双璧をなし、河内潟南岸の弥生拠点大集落、先進的な文化交流、交易の窓口であったことを如実に示している。

Ⅴ・饒速日東遷と神武東征

（一）瓜生堂遺跡と饒速日東遷

『日本書紀』『先代旧事本紀』に瑞宝十種を授けられた饒速日が、天の磐船に乗り天降り、河内国河上の哮峰に降臨したことが書かれている。河内国河上の哮峰は、生駒山系の一峯と考えられている。饒速日に供にした天香語山命（尾張連等祖）、天太玉命（忌部首等祖）、天児屋命（中臣連等祖）ら三二人、五部の人として物部造等祖の天津麻良や筑紫弦田物部等祖の天津赤星など、そして、兵杖を帯した武力集団二五部の人、最後に船長や梶取の名も記されている。船長は跡部首等祖の天津羽原、梶取は阿刀造等祖の天津麻良、船子は倭鍛師（かぬち）等祖の天津眞浦、笠縫等祖の天津麻占等である。これらの弥生文化を携えた饒速日のハイテク大集団は、いつ、どこに居を定め、生活を安定させたのだろうか。

石切劍箭神社・上の社

生駒山を東西に挟んだ北河内、中河内と大和盆地に広がったであろうことは想像できる。饒速日を祖神とする物部氏ゆかりの神社や旧蹟が数多くあることからみて、間違いはないだろう。東大阪市には物部氏の祖神、饒速日と、そ

の子可美真手を祀る石切劔箭神社があり、その祭祀を古代より担ってきた穂積氏の穂積神霊社が鎮座している。八尾市にある矢作神社、弓削神社、跡部神社も饒速日を祀っている。

また、饒速日につながる大雷火明神を祭神とする式内社若江鏡神社、分祀の小若江の神剣神社と友井の御剣神社があり、いずれも青銅金属鋳造の職能神を祀っている。

饒速日東遷の時期は、船長、梶取の名があることからみて、瀬戸内を航海することを可能とする準構造船の開発、操船技術の進歩を待ってのことだろう。

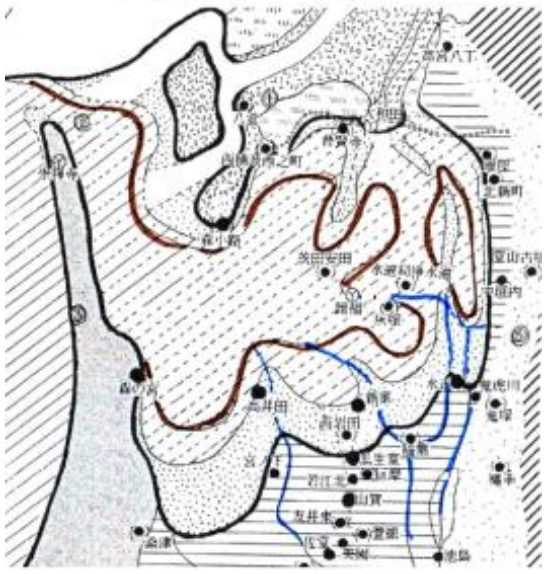
今まで述べてきた瓜生堂遺跡の具体的な動き、大規模集落の形成をみたとき、河内潟の時代、まだ汽水の影響が残る弥生中期中葉から後期（ＢＣ五〇～ＡＤ五〇）にかけてと考えられるのではなかろうか。

（二）河内潟の実相を映す神武東征の伝承

『日本書紀』神武天皇の条に「奔き潮有りて太だ急ぎに会いぬ…遡流而上（かはよりさかのぼ）りて…河内国の草香邑の青雲の白肩之津に…歩より竜田に趣く…孔舎衛（衙）坂にして…与に合ひ戦ふ」そして、「胆駒（いこま）山を踰（こ）えて、中州（なかつくに）に入らんと欲したんと欲した神武に登美能那賀須泥毘古は、「夫（そ）れ、天神（あまつかみ）の子等の来ます所以は、必ず我が国を奪はむとならむ」と。

この文章から、饒速日東遷から時を経て、同じく北九州から生駒山をめざした神武が大阪湾から河内潟に入ってからの情景描写、特に、「遡流而上」は、河内潟の干潮時にできた川を遡り岩だらけの岸に船を着けた状況は、紀元前後の河内潟の地形を知らずに表現できまい。さらに、次のような記述がある。

・浪速国とも浪波（なみはや）　・「恩（うつくしび）、母の如し」という、母木邑（おものき のむら）は豊浦が（「紀」の注）・五瀬命（いっせのみこと）が血を洗い流したという「龍の口霊泉」・傷ついた五瀬命の血を洗い流したことから



血塗りの海が訛り転化し茅渟の海＝大阪湾・孔舎衛（衙）坂・神日本磐余彦尊軍が河内潟から脱出する「南方」は「南潟」（新大阪付近）

神武東征について非実在説、虚構説もあるが、このように河内潟の状態を具体的に描くことができていることから、「神武東征」について何らかの史実が言い伝えられており、『日本書紀』の編集者は八世紀の河内湖の姿と「饒速日東遷」の事実あるいは伝承と重ねて著述したのではないだろうか。

次に、「孔舎衛（衙）坂の戦い」だが、「戦い」そのものに具体性がない。

「今我（やつかれ）は是日神の子孫にして、日に向かって虜（あた）を征（う）つは、此天道に逆（さか）れり」と記述されている。

日の神の子孫である我々が日の出の方角に攻め込んだのがまずかった。と、深い後悔の念を神武に語らせている。しかし、実際の「戦い」は、どうだったのだろうか。

瓜生堂と周辺遺跡から出土した多数の讃岐・金山産サヌカイトの鋭い石鏃、そして、「戦士の墓」が極めて少ないこと、そして、狭隘な「坂」での戦いであったことからみて、大規模な戦いが行われたとは考えられない。

それは、強力な兵力を拠り所にしていた神武だが、饒速日と登美能那賀須泥毘古連合、生駒西麓・東麓の集落、そして、河内潟周縁の集落の人々からなる圧倒的多数の「民衆の兵士」を前にして、為す術もなく紀伊に迂回せざるを得なかったのではと、考えられる。

（三）「瓜生堂遺跡」の歴史は、東大阪における登美能那賀須泥毘古に代表される「縄文」の世界と饒速日に代表される「弥生」の世界の歴史的な展開を如実に示しており、興味が尽きないものがある。

時代の大きな変革期にあって異なった新旧の文化が互いに排除し合うのでなく、共存しながら互いの良さに学び豊かな文化、暮らしを創造する「知恵」を持つことの大切さを教えてくれているのではないか。

（東大阪文化材を学ぶ会）

参照文献

・『ゼロからの古代史事典』ミネルヴァ書店
・『瓜生堂遺跡Ⅰ』、『宮ノ下遺跡Ⅰ～Ⅱ』、『新家遺跡Ⅰ』何れも大阪府文化財センター
・『大阪遺跡』大阪市文化財協会
・『大阪平野の成り立ち』大阪平野のおいたち』梶山彦太郎・市原実共著青木書店
・『都市と神殿の誕生』新人物往来社
・『日本書紀』岩波書店
・『先代旧事本紀』新人物往来社